<<研究主題>>

「自立した学び手」の育成を目指した学習指導

～生徒と創る単元内自由進度学習～

西之表市立種子島中学校 教諭 川畑　智子

目　次

1　研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

2　研究主題に関する基本的な考え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

⑴　自立した学び手

⑵　自由進度学習

3　研究のねらい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

4　研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

5　研究の構想図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

6　研究の実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

⑴　学習内容や学習方法を選択できる学習計画表の工夫

⑵　タブレット端末等を活用した個に応じた指導の充実

⑶　生徒一人一人の興味・関心，学習のスピード等に対応できる学習環境の工夫

7　研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9

⑴　ScTN を活用した結果より

⑵　数学の授業に関する意識調査より

⑶　成果と課題

8　今後の研究について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10

【引用・参考文献】

○　文部科学省

『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　総則編』　日本文教出版株式会社

平成 30 年２月 28 日

『子供たちが主体的に学べる多様な学びの実現に向けた検討タスクフォース 論点整理』

https://www.mext.go.jp/a_menu/other/mext_00009.html　令和６年 11 月 23 日閲覧

『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）』令和３年１月 26 日

『個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方に関する別部会』

中央教育審議会　令和６年１月 16 日

○　Nits　セミナー資料

『子どもを主語にした学びという視点からもう一度学校教育を見つめ直してみる』

奈須正裕（上智大学）

『単元内自由進度学習の計画づくり』　佐野亮子（東京学芸大学）　藤本勇二（武庫川女子大学）

○　『ブラッシュアップ熊毛（熊毛の教育グランドデザイン）』

○　一般財団法人 ScTN ホームページ（https://sctn.jp/questionnaire）令和６年 10 月 11 日閲覧

○　『「自立した学習者」を育てる学校・授業の在り方』（財）総合初等教育研究所 参与　北 俊夫

○　『個別最適な学びと協働的な学び』奈須正裕　著　　　東洋館出版社　2022 年

○　『現代新国語辞典 第七版』　　三省堂　2024 年１月 10 日

1　研究主題設定の理由

文部科学省の「子供たちが主体的に学べる多様な学びの実現に向けた検討タスクフォース論点整理」によると,「グローバル化の進展や，AI・ロボティクスなどの分野における絶え間ない技術革新等により社会の在り方は大きく，そして急速に変化しており，将来を予測することが困難な時代を迎えている。こうした時代を生きていく子供たちにあっては，未知の場面や状況にあっても，自ら課題を発見し，自分の強みを活かし，他者とも協働しながら，課題解決に向けて主体的に判断し自らの考えを表現していく力が求められる。」とある。このような力を生徒が身に付けるには，これまでの学校教育における学びの姿も進化していかなくてはならない。

平成 29 年・30 年に告示された現行の学習指導要領においては,「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通して，これからの時代に必要な資質・能力を子供たちに育成していくことが明記されている。さらに，学校における１人１台端末の導入も踏まえ，令和３年の中央教育審議会答申においては，全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことの必要性が指摘されている。

一方，生徒の状況に目を向けると，社会の変化の中で，その多様性が顕在化してきている。例えば，特別な支援を要する児童生徒や学校になじめず不登校となっている小中学生の数が令和３年度時点で過去最高の 24 万人に及んでおり，子供たちの学習の進度や学び方の特性，その興味・関心も一人一人の様子が大きく異なる状況にある。

本校では，地域の小学校 10 校で学んできた生徒が入学してくる。通常の学級９学級，特別支援学級７学級，通級指導教室と，鹿児島県内の離島において，最大の中学校でもある。不登校の生徒も改善傾向にあるものの，生徒の学習の進度や学び方の特性，そしてその興味・関心も大差があり，授業改善の必要性を感じる１年目であった。そこで，本校の教育目標である「心身ともに健康で，自らの将来の生き方を考え，よりよい未来を創る生徒の育成～2050 年の種子島について，自ら考え，行動することができる～」を実現するために，自立した学び手を育成しようと授業改善に取り組んできた。

ブラッシュアップ熊毛の『「つなぐー寄り添うーそろえる」の三つの視点に基づく「心を動かす」関わりを通して,「やればできる」という心を育む」』を核として，自由進度学習を中心に授業改善を行うことで，自立した学び手を育成することができ本地区，本市，本校の教育目標を実現することができると考え本研究主題を設定した。

2　研究主題に関する基本的な考え方

⑴　自立した学び手

「自立」とは，国語辞典によると,「親からの経済的援助などを受けず，社会人として自分一人の力で生計を立てること。他に依存することなく，自分自身の判断に基づいて責任をもった行動をとること」と解説されている。簡潔に言えば「ひとりだち（独り立ち）」すること。生活において自立するとは，親元から離れて社会に巣立っていくことである。人生において独り立ちするには，生活面をはじめ精神面や経済的な側面と，さらに，学習面の自立があると考える。つまり「自立」には，将来の社会生活を豊かに送るという意味合いが含まれている。

北※1）は,「自立した学び手」とは，教師や親などから指導や援助を受けずに，自分の力で課題を設定し，解決に取り組み，成果や結果を生み出すことであると述べている。つまり，独り立ちして学ぶことや自学することであると言える。具体的な姿として考えると，次の資質・能力を身に付けた姿として捉えることができる。

※1）一般財団法人 総合初等教育研究所 参与　北 俊夫　「自立した学習者」を育てる学校・授業の在り方より

・　日常生活において身の回りの様々な事象に自ら興味・関心をもち，解決すべき課題や挑戦し，課題を見いだすこと。
・　課題解決や課題挑戦の方法を自ら考え，自ら見通しをもち，意欲を高めること。
・　計画に基づいて，他人の手を借りずに自力で学習を持続的に展開すること。また，必要に応じて自ら支援を求めること。
・　自らの学習やその成果に対して，自ら設定した規準で評価し，学習の達成感や成就感を味わうこと。また，新たな課題を見いだすこと。

社会人として巣立っていくまでに，このようなことができる生徒を育てることが期待されていると言える。つまり，学校では，生徒一人一人が学校で学ぶことや教科等を学ぶことの意義や価値を理解し，目的意識をもって学ぶことが「自立した学び手」を育成することにつながる。

⑵　自由進度学習

これまでの授業の多くは，同じ内容を同じ方法で，そして，同じ時間で学ぶスタイル，つまり一斉・画一的に行われていた。この形態は，一定の内容を効率よく伝達することができる反面，子供一人一人の学びへの興味・関心を十分に生かすことは難しく，結果として受け身の姿勢を助長することになっていた。これでは，学習指導要領で示されている，子供一人一人の興味・関心や発達の状況等を踏まえてそれぞれの個性を伸ばし，資質・能力を高めていく教育には限界がある。2022 年 4 月に組織された，中央教育審議会の「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方に関する特別部会」では，「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通じて，主体的・対話的で深い学びの実現を目指すための方策等の検討の中でこの学習スタイルが紹介された。自由進度学習は，教師が計画する学習内容のフレーム内で，子供一人一人が課題を自己決定し，計画を立てて自分の学習速度で進め，その過程で友達と相互に作用しながら学びを深めていくことを目指したものである。（**図１**）

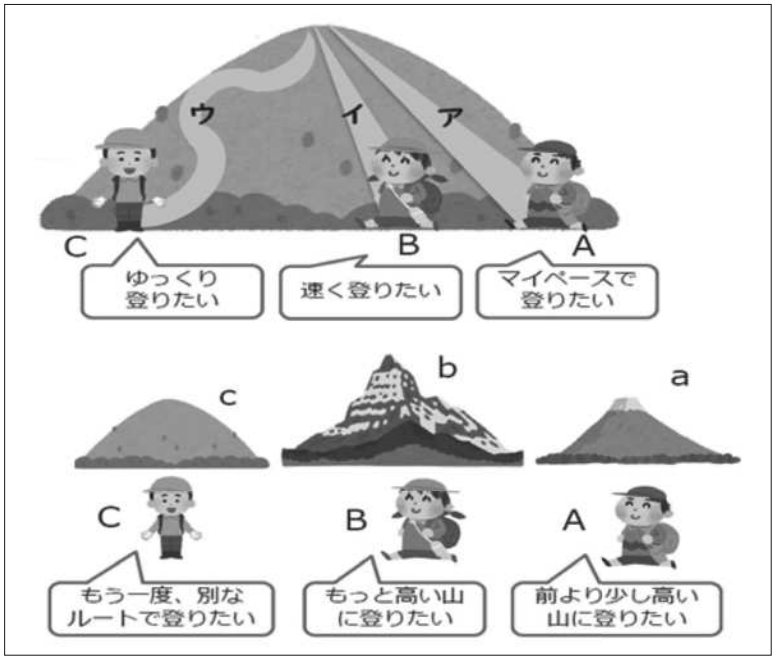


図１　自由進度学習のイメージ図
独立行政法人教職員支援機構　授業・単元づくり編「学力向上の取組」より抜粋

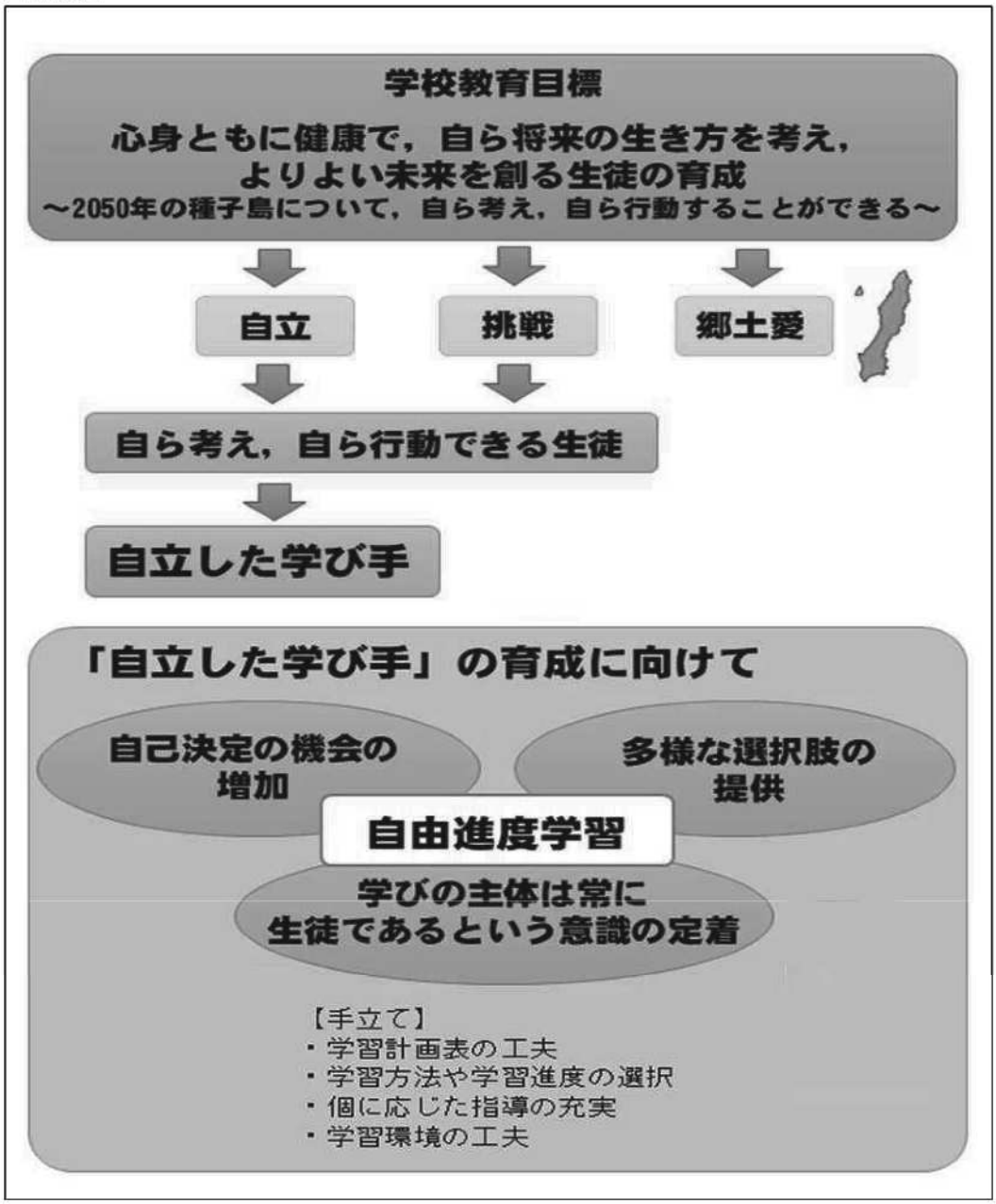
3　研究のねらい

(1)　学習内容や学習方法を選択できる学習計画表の工夫 (2)　タブレット端末等を活用した個に応じた指導の充実 (3)　生徒一人一人の興味・関心，学習のスピード等に対応できる学習環境の工夫

4　研究の仮説

本校の学校教育目標である「心身ともに健康で，自ら将来の生き方を考え，よりよい未来を創る生徒の育成」を達成するために，単元内自由進度学習を柱として学習計画表の工夫，学習方法や学習進度の自己決定の機会の提供，個に応じた指導など学習環境を整えれば，自立した学び手を育成できるのではないだろうか。

5　研究の構想図



6　研究の実際

⑴　学習内容や学習方法を選択できる学習計画表の工夫

ア　単元の目標と振り返り

学習計画表のシートには，まず，教師が提示した単元目標を提示し，それを踏まえて，生徒の立てた目標と単元の振り返りを書けるようにした。また，単元の最後には単元の振り返りも書かせ，家庭学習や定期テスト等へどのように生かせるかを書かせた（**図２**）。

毎時間の振り返りは，スプレッドシートを用いた（**図３**）。毎時間，振り返りを行うことで，自分自身の学習について見つめ直し，それを生かして学習形態の見直しを自己決定させることができる。また，教師は，全員の学習の状況を瞬時に把握することができ，１単位時間の終末において，理解度に応じてフォローをすることができるというメリットがある。

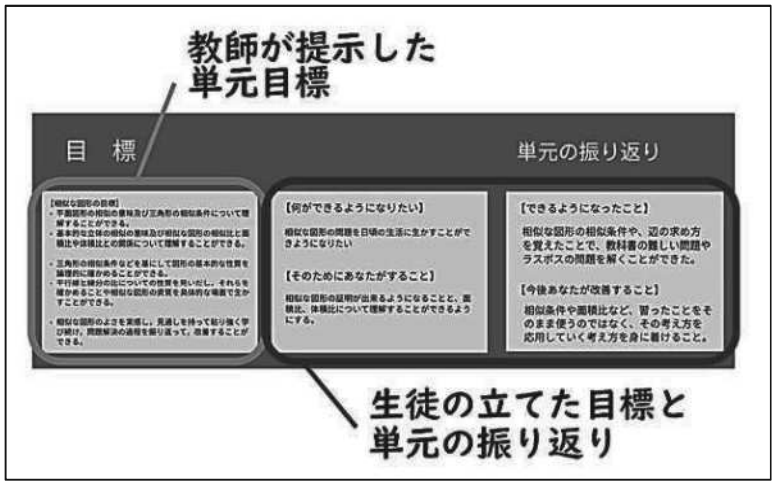


図２　単元の目標と振り返り

図３　毎時間の振り返り

初めは，単元の目標と単元計画表，振り返り等を別々に作成し，提出をさせていた。また，振り返りを入力するスプレッドシートをリンクを貼らずに書かせていたため，生徒から使いにくさについて指摘があった。そこで，単元後にアンケートを取り，どのように改善すると学習を進め

やすいかを問い，そこで出てきたのが，この形である。学習支援ツールの一つであるロイロノート・スクール（以下「ロイロノート」という。）のカード１枚に振り返りのためのスプレッドシートのリンクや動画資料等を全て集約させ，生徒へ提示する方が全体の流れが見えやすいため，学習者の思いに寄り添い，修正を重ねていった（**図４**）。学習者も使いやすく，学習者それぞれの学習の経過や困り感を教師も学習者も確認することができた。

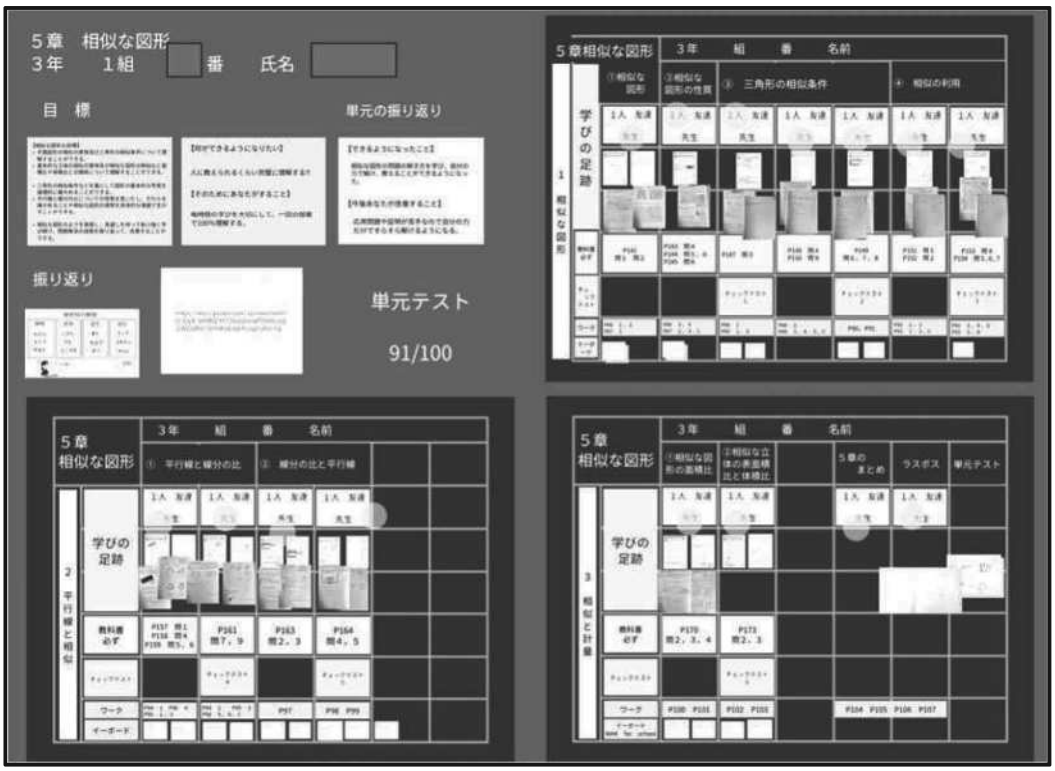


図４　改良を重ねた学習計画表

イ　学習計画表

生徒が見通しをもって学習できるように，教科書や問題集，ワークシート等に対応した学習計画表を作成した。改良を重ね，**図４**の形にした。最初に提示した学習計画表（**図５**）は，「単元の一連の流れがひと目で分かりにくいから改善してほしい」という生徒の要望があった。生徒の思いに寄り添ってみると，どのような内容をこれから学習していくのかが書いてある方が学習のつながりが分かりやすいというという学習者の思いがあった。単元の最初に準備することは大変な労力になるものの，教材研究を単元の始めにすべて行うため，教師側としても見通しをもち指導を行うことができるというメリットも大きい。

また，学習計画表には，自己選択や自己決定の機会を多くもてるように改善した（**図６**）。全員が必ず取り組む学習と自分で決めて自由に取り組む学習を設定し，学習内容も選択できるようにした。15 時間かけて学ぶ内容を 10 時間でまず全て終わらせ，そのあと発展的な課題に挑戦する生徒や１時間ご

図５　以前使用していた学習計画表

とに，発展的な内容まで学習する生徒，そして，生み出された時間を活用して，教師が作成した解説プリントを更に発展させ，解説動画（**図７**）を作成する生徒など，学びを自己調整する生徒も出てきた。

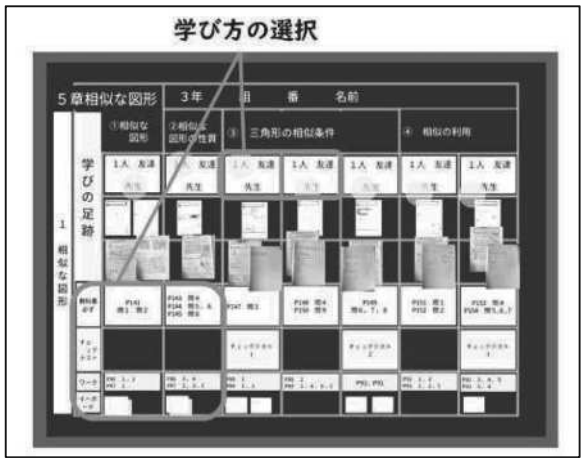


図６　学び方が選択できる学習計画表

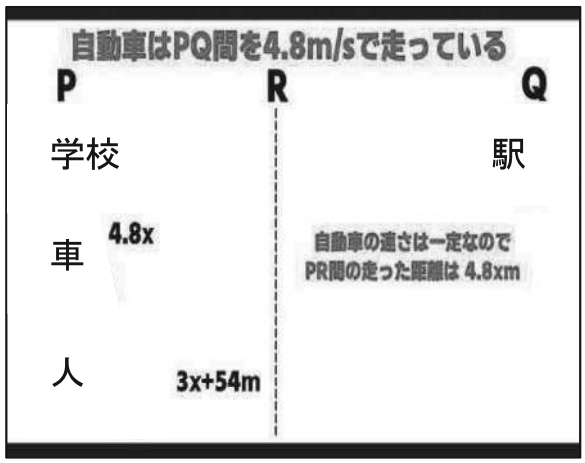


図７　生徒の作成した解説動画

ウ　学びの見取り

生徒の学習状況や定着度を知ったり指導や評価に生かしたりするために，チェックテストを設けたり，ワークシートの提出をさせたりした。チェックテストは，学びを止めない程度に３回程度としていた。しかし，これも生徒のアンケートから，定着できているかを細かく知りたいため回数を増やしてほしいという意見が挙がってきた。そこで，節ごとにチェックテストを実施するように変更した。また，指導と評価に生かすために，振り返りの記述なども大切にした。生徒がどのような問いをもっているかを把握し，それらを次時に生かせるようにした。必要に応じて一斉指導による定着確認を行ったり，個別支援の充実を図ったりしながら授業を改善し，指導と評価の一体化に努めた。その中で，授業中の行動観察や小テストの結果，ワークシートチェック等で個別に支援が必要と判断した場合には，すぐに個別支援を行った。

⑵　タブレット端末等を活用した個に応じた指導の充実

ア　イーボードの活用

イーボードは，NPO 法人 eboard が開発する ICT 教材である（**図８**）。「誰でも，どのような環境にあっても学ぶことをあきらめてほしくない」という思いから，家庭や公立学校等では，無料で利用することができるツールである。つまずいた単元では，さかのぼって学習することができ，一人一人の特性に応じて動画視聴をすることもできる。教師の授業は学校に登校しなければ授業を進めることができないが，教科書以外に，イーボードの授業動画を学習計画表に載せることで，感染症に罹患し，学校に登校することができない生徒な

図８　イーボード

ど，様々な生徒のニーズに対応することができた。その結果，授業を休んでいても，家庭で学習し，学校に登校した際に疑問を話してきたり，ロイロノートを使って解説をお願いしたりする生徒など，多種多様な学び方を展開できていた。

イ　ロイロノートの活用した個に応じた指導の充実

個に応じた指導の充実の一つとして，ロイロノートの活用を行った。定着度に応じて，ヒントカードを送ったり，知識の定着が必要な場合には，一斉にテストを行い提出箱に提出させたりした。また，生徒が自らロイロノートを活用して質問を行うことも出てきた。例えば，分からない問題に出合ったときに，まず，教科書やワークを活用する。その後友達と解決を行うが，どうしても解決に至らない場合や家庭学習で疑問に思った問題を送るようになってきた（**図９**）。また，一人の分からない問題を全体に共有することで，単元テスト前には，それぞれで解説をし合うなど，全体の理解も深まりが見られた。

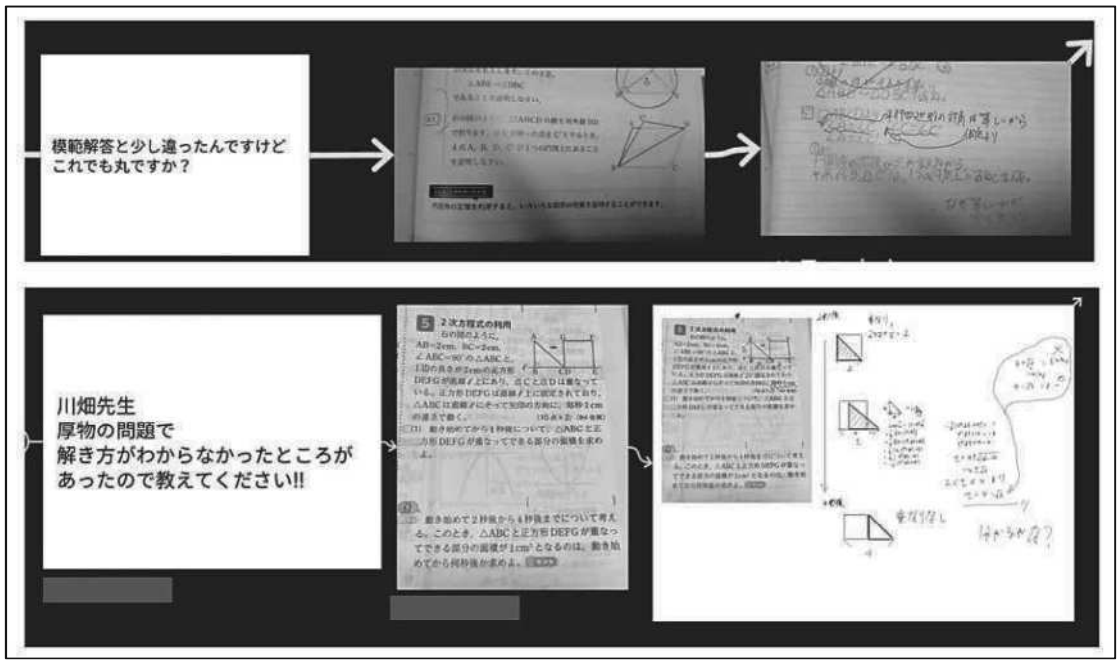


図９　質問カードのやりとり

⑶　生徒一人一人の興味・関心、学習のスピード等に対応できる学習環境の工夫

生徒一人一人の興味・関心，学習のスピード等に対応できる教材の準備や学習スペースの工夫を行った。興味・関心，学習のスピード等に対応できる教材として，中学校三年生ということもあり，章のまとめの問題と単元テストの間に，高校入試問題を解く時間を設けた。数か月後に解く問題であるため，これを解けることを目標に努力する姿も見られた。また，学習スピードの早い生徒は，この問題を解説する動画をタブレットを使って作成していた。

また，学習スペースの工夫を行った（**図10**）。学習スペースは，自由に行き来する

図 10　学習スペースの工夫

ことも可能で，授業の始めには，教師と学ぶことを選択していた生徒も，途中から，一人で学ぶことに変更し場所を変えて黙々と学習に取り組む姿も見られた。結果として，このように学習スペースをある程度設定することで，生徒が自己選択と自己決定を大事にしながら自分のペースで学習を進めていくことができた。

7　研究の成果と課題

習熟度別指導発展コースを中心とした三年生を対象に，ScTN 質問紙や自身で定期テストごとに実施している数学の授業に関する意識調査を活用して分析した。

⑴　ScTN を活用した結果より

ScTN[※2)] は，児童生徒の自己評価を回答方式とした主体的・対話的で深い学びのための意識・実態調査である。ScTN の内容としては，大きく分けると，(1) 主体的・対話的で深い学びを中心とした「学校教育の経験」とともに，(2) 経験がもたらす「成長」としての「学びに向かう力」と「人間性」の育成状況，(3) 経験と成長を通した「学校教育の成果の実感」を測ることができるようになっている。よって，現在の学びの在り方を，公教育の本質と正当性の原理にかなうよう，主体的・対話的で深いものに構造転換する支援ツールとして活用することができる。

そこで，自由進度学習を行う前に，ScTN を用いて調査を実施したところ，以下のような結果が得られた。９月は，「授業では，『授業を進めるのは，先生でなくて，自分だ』」の質問に対して，「いつもそうだ，だいたいそうだ」と思いながら学んでいると答えた生徒が 39.1%だったのに対して，12 月は，91%の生徒が「いつもそうだ。だいたいそうだ。」と答えている。自己決定に貫かれた学習が大きく改善したことが分かる（**図 11，12**）。

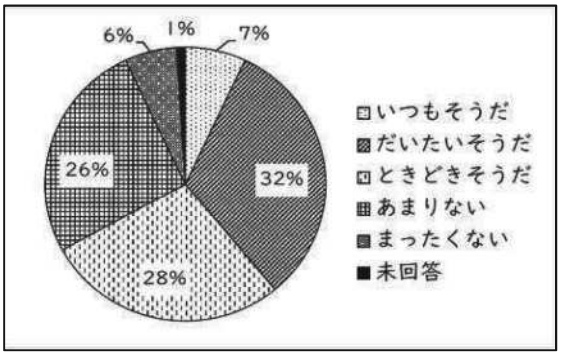


図 11　９月に行った意識調査

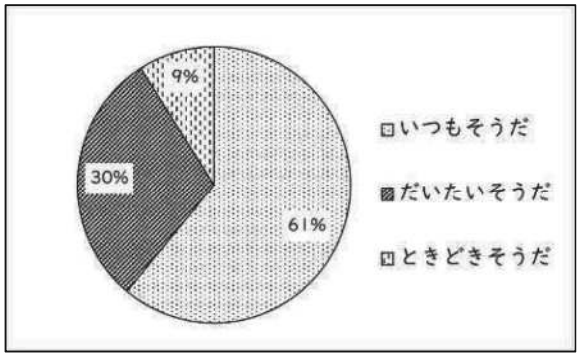


図 12　12 月に行った意識調査

また，「授業では，学習の方法やペースを自分で選んだり決めたりしながら学んでいる。」については，73.9%から 83.1%，「授業中，分からないことがあれば，先生が自分に合わせて教えてくれる。」については，73.9%から 85.1%と改善し，個性化した学習や個別化した指導が定着してきたことも分かった。

⑵　数学の授業に関する意識調査より

定期テストごとに行っている数学の授業に関する意識調査より，自由進度学習について「このまま進めたい」と答えた生徒が 90%を上回った（**図 13**）。「このまま自由進度学習を進めたい。」と答えた生徒は，「自分のペースで進められ，分からないところは聞けるからよい。」，「得意な単元では，

※2) 一般財団法人 ScTN ホームページ（https://sctn.jp/questionnaire）より

早く進めて演習に時間をかけるなど，臨機応変に学習が進められる。」，「自分に合った学び方ができるからこのままがよい。」と答えた。逆に，「以前の学習のままがよい。」と答えた生徒は，「先生にガイドしてもらいながら進めるのであまり変わらない。」，「早く進められるのは良い点ではあるが，先生が色々な生徒のところに行っているので質問がしにくかった。」と答えた。「改善が必要である。」と答えた生徒は，自分自身の改善点を挙げていた。この結果より，自由進度学習は一定の効果はあった。しかし，教師としての私自身の授業のファシリテーション力を指摘する意見もあった。そのため，その生徒に寄り添い，どのような支援があれば改善できるかを意識調査後にカウンセリングした。結果として，次の単元では，この生徒も自由進度学習に対して「このまま進めていきたい。」と回答している。このように，生徒の思いに寄り添い授業改善を行うことで，少しずつではあるが，自己選択，自己決定を行うことができる自立した学び手の育成につながっていると実感できた。

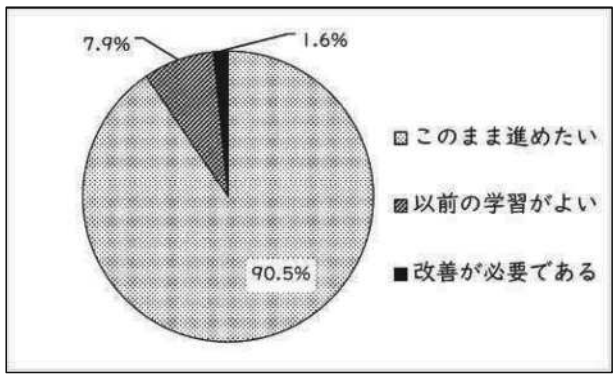


図 13　自由進度学習に関する意識調査

(3)　成果と課題

○　授業をどのように進めていきたいのかを生徒と話をしながら練り上げることができた。

○　学びの主体は常に生徒であるという意識が定着してきた。

○　多様な学び方を提供することにより，自己決定に基づく学び方の工夫や学習進度の工夫など，教師の想像を超える学びを展開することができた。

▲　全ての単元において実施していないため，どの単元が自由進度学習に適しているかを実証できていない。

▲　学校教育目標を達成するためには，他教科や同じ教科の先生方と生徒を主語にして語り合い，授業改善を行う必要がある。

8　今後の研究について

本年度夏季休業中に，Nits の『単元内自由進度学習から考える「子供を主語にした個別最適な学び」セミナー』を受講した。そこで，全国の先生方の実践から，本校でも他様な学習の進め方を実践できる環境を整えることが課題であることに気付かされた。様々な学校へ研修に出向き，本校で実践を本格的に始めたのが２学期からである。そのため，まだ研究の途中であり，全ての生徒の学力を身に付けることができたとは言い切れない。しかし，この研究を通して得られたことは，生徒自身が，一斉授業を行ってきたときよりも，意欲的になり，学び方も工夫し始めたことである。

このように，教師が授業改善に真剣に向き合うことで，生徒も自分たちの思いを表出させ，今まで以上に真剣に学習に取り組むようになり，教師の学びと生徒の学びが相似形になってきた。

これからも，日々の授業を通して授業改善を重ね，これを学校全体へ普及させ，生徒の学力を着実に身に付けさせていきたい。